

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530810

研究課題名（和文） ニュージーランドにおける保育の自己評価とアセスメントに関する研究

研究課題名（英文） A STUDY OF SELF-REVIEW AND ASSESSMENT IN EARLY CHILDHOOD CARE AND EDUCATION IN NEW ZEALAND

研究代表者

鈴木 佐喜子（SUZUKI SAKIKO）

東洋大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：70196814

研究成果の概要（和文）：本研究では、ニュージーランドにおける保育のセルフ・レビューが情報の収集、分析を行い、改善を行う取り組みであることを明らかにした。施設長・保育者調査の結果は、多様なセルフ・レビュー実践、アセスメント実践が展開され、多くの保育者がセルフ・レビューとアセスメントを高く評価していること、セルフ・レビュー、アセスメントの遂行のためには作成に専念する時間や職員研修が必要であることを示している。

研究成果の概要（英文）：The findings of this study suggest that self-review in early childhood in New Zealand is the process of gathering, analyzing information and formulating decisions in order to implement improvement. The results of my research related to managers and teachers/staff show that there are various types of self-review, assessment practices, and many of them recognize the value of self-review and assessment, but to be able to successfully implement self-review and assessment, noncontact time and professional development is necessary.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：ニュージーランド、保育・幼児教育、自己評価(self-review)、アセスメント、学びの物語、マーガレット・カー

1. 研究開始当初の背景

我が国では、「評価の時代」への突入（田中耕治『教育評価』、岩波書店、2008年）と指摘されように、保育所の第三者評価制度の導入、平成20年に改訂された新保育所保育指針における「保育の内容等の自己評価」（「保育士等の自己評価」「保育所の自己評価」）など、社会全体に保育の評価・自己評価への関心が高まっている。特に、保育・幼児教育の施設や保育者の主体性を考えれば、保育所・保育士等の自己評価がその重要な柱となることは間違いない。また、実践の評価・アセスメントが、保育実践の改善・向上という観点から欠かせないことも明らかである。しかし、保育・幼児教育における評価、自己評価については、学校教育との法令上の位置づけの違いもあり、これまで必ずしも正面から取り上げられておらず、学問的な検討も十分とは言えない現状がある。また、保育の計画と評価は、保育の改善・向上に大きな役割を果たすものであるが、保育の実際と乖離し、保育の質の改善・向上に有効に結びついていない状況も見受けられる。従って、保育における自己評価や保育実践の評価の内容、方法、枠組み等をニュージーランドに即して具体的に検討し、保育内容の改善、実践の向上につながる評価・自己評価のあり方を解明することには、重要な意味があると考えられる。評価方法の問題は、単なる技術的な問題ではなく、教育実践の持続的な改善にとって本質的な営為である。的確な評価方法が開発されていない場合、実践の当否を問えないままに実践が空洞化する危険性があるからである（田中耕治 2008）。保育内容の改善、実践の向上につながる評価・自己評価のあり方を考察し深めることは、以上の点から重要な意義を持つと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、「ニュージーランドにおける保育・幼児教育施設の外部評価、自己評価とアセスメントに関する総合的研究」の全体構想のなかの一つの研究として位置づくものである。

本研究の目的は、ニュージーランドの保育評価の制度と実践を対象として、(1)施設内部の評価であるセルフ・レビュー (self-review) の概念、目的、評価過程、評価の要素等を把握するとともに、その特徴を明らかにすること、(2)外部評価である教育評価局 (Education Review Office: ERO) (以下 ERO とする) による教育評価 (Education Review) とセルフ・レビューとの関係、保育実践におけるセルフ・レビュー実践の内容・実践とアセスメント実践の相互関係と全体像を明らかにすること、(3)保育・幼児教育

施設の施設長や保育者のなかで、セルフ・レビュー、アセスメントがどのように位置付き、保育現場にどのような変化をもたらしたかを把握し、改善につながる要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) ニュージーランドを中心とした保育・幼児教育のセルフ・レビュー及びアセスメントに関する文献の検討。

(2) 保育・乳幼児教育施設におけるセルフ・レビュー及びアセスメント実践に関する訪問・見学調査による事例収集と施設長・保育者に対する調査。

(3) アセスメントに関する研修・専門性開発 (Professional Development) 関係者 (スタッフ・研究者・教育省職員等) に対する聞き取り調査。

4. 研究成果

セルフ・レビューに関する研究

(1) セルフ・レビューの定義

「乳幼児教育のためのセルフ・レビュー・ガイドライン (Nga Arohaehae Whai Hua: Self-Review Guidelines for Early Childhood Education) (以下セルフ・レビュー・ガイドラインとする)」によれば、セルフ・レビューは、「実践を評価する (evaluate) ために乳幼児教育サービスの中で引き受けられるレビュー」のことである。ERO のような外部団体が保育における教育の質を評価する (evaluate) 外部レビューに対して、セルフ・レビューは、保育施設の内部で保育者によって行われる取り組みである。

(2) セルフ・レビューの4つのプロセス

セルフ・レビュー・ガイドラインは、セルフ・レビューの4つのプロセスを提示している。①何をなぜ、調査・再検討するかを明確にし、情報源を定め、計画を立てる準備 (Preparing)、②判断の証拠 (evidence) となる多様な情報を収集する収集 (Gathering)、③収集した情報の個々の側面を綿密に吟味・分析する情報の意味の解明 (Making sense)、④分析を踏まえうまくいっていること、改善する必要のあることを明らかにし、改善のための計画を立てる決定 (Deciding) である。

(3) セルフ・レビュー実践の特徴

セルフ・レビュー・ガイドラインに紹介されているセルフ・レビューの実践事例及び保育施設への訪問・聞き取り調査から、セルフ・レビュー実践の特徴を整理した。

①施設の独自の問題関心を出発点として多様なレビュー・テーマで取り組まれていること、②質問紙、インタビューや話し合い、プロファイルや記録の分析、ワークショップ

等、セルフ・レビューで用いられる方法も多様であること、③専門的な教師たちが他の人々から孤立して取り組むものというよりも、親、地域の人々や子どもなどのより広いコミュニティを基盤として、乳幼児教育施設の職員が協同で取り組む協同的実践であること、④レビューにおける情報収集と分析を通じて、自らの保育実践を振り返り、認識を深めていることである。

(4)セルフ・レビュー実践の現状と課題

1996年、乳幼児教育のナショナル・カリキュラム・テ・ファリキ (Te Whariki) に伴って改訂された乳幼児教育サービスの認可要件を示した「改訂版：ニュージーランド認可乳幼児教育施設に望ましい目的と実践 (Revised Statement of Desirable Objectives and Practices, DOPs) (以下 DOPs とする) for Chartered Early Childhood Services in New Zealand)」において、乳幼児教育施設の方針、目的及び実践が、内部 (internal) レビューの記録によって、定期的に評価 (evaluate) され、修正されることが明記されたことを契機として、補助金を受ける認可乳幼児教育施設は内部レビューを実施して保育を評価・改善することが要求されることとなった。

2006年には教育省 (Ministry of Education) は、「乳幼児教育のためのセルフ・レビュー・ガイドライン (Nga Arohaehae Whai Hua: Self-Review Guidelines for Early Childhood Education)」を出し、セルフ・レビューの推進に力を入れている。ERO (2009) の報告書「乳幼児教育施設におけるセルフ・レビューの実施 (Implementing Self Review in Early Childhood Services)」によれば、「よく理解し実施していた」施設が14%、「一定の理解と実施」が42%、「限定的な理解と実施」36%、「理解と実施なし」8%という状況で、十分に理解し実施されているとは言えない状況に留まっている。

報告書は、セルフ・レビューの改善を妨げる要因として、セルフ・レビューの理解の欠如、体系的なレビューの枠組みの欠如、セルフ・レビューへの職員の関与・参加の欠如をあげている。その背景として、職員の頻繁な入れ替わりがセルフ・レビューの継続的な取り組みを困難にしていること、保育時間の拡大とシフト勤務により、セルフ・レビューに不可欠な職員同士の対話や話し合いを持ちにくくしていることが指摘されている。

(5)セルフ・レビューに関する施設長・保育者調査の結果

保育者に対する調査では、幼稚園6、保育センター9、プレイセンター1、家庭的保育1の計17施設、幼稚園10名、保育センター20名、プレイセンター1名、家庭的保育2名の計33名から回答を得た。

施設長に対する調査では、幼稚園5名、保

育センター2名の計7名から回答を得た。これらの結果から以下の点が明らかになった。

①セルフ・レビューは、ある特定の分野・テーマを取り上げ、保育実践を振り返り、評価し、それを改善することと捉えられていた。セルフ・レビューは、セルフ・レビュー・ガイドラインに示されているように、施設独自の問題関心を出発点として多様なテーマで取り組まれ、集団的に取り組まれていることが明らかになった。

②セルフ・レビューに対しては、「やりがいがある」「実践を振り返る機会になる」「改善につながる」など、その意義を評価していることが明らかになった。また、セルフ・レビューは、「学習効果があがる」など、子どもにとって良いと考える保育者が多いことも明らかになった。

③セルフ・レビューの問題点として、時間や記録・仕事量の増加があげられ、専門性開発の研修や時間保障等の保育条件がセルフ・レビューの遂行に密接に関わっていることが浮き彫りになった。

アセスメントに関する研究

(1)ニュージーランドの保育におけるアセスメント実践の広がり

アセスメントもセルフ・レビューと同様、DOPsにおいて、認可の保育施設は、子どもの学びのアセスメントをドキュメントすることが求められている。カリキュラムと同じ理念・見解にたつ新しいアセスメントの必要性が高まった。アセスメントは、カリキュラムの実施により、子どもたちの学びがどのようになされたかを明らかにし、検証するものだからである。

当時のアセスメントは、ハサミが使える、自分の名前が書ける等、初等学校入学前の子どもの発達の状態をチェックすることであった。カリキュラム策定に関わったマーガレット・カー (Margaret Carr) は、保育者とともにプロジェクトを立ち上げ、その成果をもとに「学びの物語 Learning Story」という従来のアセスメントに代わる新しいアセスメントの理念と方法を提起した。「学びの物語」は、アセスメントの一つの理念・方法であり、その特徴は、①子どもへの信頼に基づく (credit based) アセスメント、②「関心を持つ」「熱中する」「困難や不確かなことに取り組む」「他者とコミュニケーションを取る」「責任を担う」という5つの子どもの学びの構えを視点として、子どもの学びを捉えようとするものであること、③チェックリストや点数ではなく、語り (narratives) によるアセスメントであること、④子ども・親に開かれ、共に作り出すことを位置づけたアセスメントであることがあげられる。

「学びの物語」が広がるなかで、教育省は、

アセスメント実践の普及に力を入れ、アセスメント実践事例集「ケイ・トゥア・オ・テ・パエ（地平線を越えて）学びのためのアセスメント：乳幼児教育実践例集」(Kei Tua o te Pae Assessment for learning: Early Childhood Exemplars, 1-20, 2004-2009)を次々に刊行するとともに、「ケイ・トゥア・オ・テ・パエ」の専門性開発(Professional Development)を推進した。実践事例集は、アセスメントの考え方、カリキュラム「テ・ファリキ」との関連等が示され、実践事例が紹介され、そのなかには「学びの物語」も数多く含まれている。

この結果、アセスメントや「学びの物語」は、保育現場に急速に普及し、アセスメント実践や保育実践を大きく変える役割を果たした。アセスメントの意義に対する認識が高まるにつれ、アセスメント作成のための時間を保育者に保障するノン・コンタクト・タイムを導入する保育施設も増加して来た。

(2)アセスメント実践の課題

研究者に聞き取り調査を実施するなかで、アセスメントや「学びの物語」の課題も明らかになって来た。

①保育者が、アセスメント記録や「学びの物語」を作ることが自己目的化され、アセスメント「学びの物語」の意味が保育者に十分に理解され、深められていないという問題である。作成された「学びの物語」が、ただの「物語」になっている、子どものポートフォリオが作品や物語・記録の収集に留まり、子どもの学びを明るみに出す「学びの物語」になっておらず、学びの分析が十分ではない場合もある。

②アセスメントの質を高めるためにも、専門性開発、話し合いやアセスメント作成の時間保障などの保育条件の改善が求められている。

(3)アセスメント「学びの物語」に関する施設長・保育者調査の結果

本調査では、「学びの物語」を中心に施設長、保育者に調査を実施した。保育者に対する調査では、幼稚園15、保育センター11、プレイセンター1、家庭的保育1、不明1の計29施設、幼稚園22名、保育センター25名、プレイセンター2名、家庭的保育2名、不明1名の計52名の保育者から回答が得られた。施設長に対する調査は、幼稚園4名、保育センター1名の計5名から回答が得られた。その結果、以下の点が明らかになった。

①52名中42名と、圧倒的多くの保育者が、「学びの物語」を肯定的に捉えていた。特に、「楽しい」「面白い」「好き」など、保育者が「学びの物語」を楽しみ、深く心を傾けていることが特徴である。その理由として、子どもの理解が深まり、子どもの学びが見えて来ること、子どもや親の参加が増えるという

手応えを感じられること、保育者の主体性が発揮出来ることがあげられ、「学びの物語」によるアセスメントが保育者の保育への意欲を引き出していることが推察された。

②アセスメントや「学びの物語」の実践が、第一に、子どもや保育に対する見方や取り組みの変化—子どもに対する信頼に基づく(credit model)見方、子どもの学び・興味に焦点を当てる、子どもを学びの主体として捉える、保育に対する反省的な見方や保育計画の捉え方等—、第二に、保育者や職員同士の人間関係の変化—職員同士の話し合いや親との関わりの増加など—保育を大きく変えたことも明らかになった。

③アセスメント作成に「時間がかかる」ことや作成のための「時間がない」ことが、アセスメントに関わる問題として、保育者・施設長からあげられた。さらに、「子どもを見て学びを捉えること」「正解がないこと」など、「学びの物語」を理解し実践することの難しさ、「保育者による捉え方の違い」や「どの子どもにも平等に書かれる」ことも課題として指摘された。セルフ・レビュー同様、ノン・コンタクト・タイムの保障等の保育条件の改善、専門性開発の研修の充実が重要な課題である。

外部評価と保育施設内部におけるセルフ・レビュー、アセスメントとの相互関連

(1)外部評価とセルフ・レビューの関連

外部評価である教育評価(Education review)は、EROによって行われる。EROは学校や保育施設のセルフ・レビューを重視し、EROの外部評価とセルフ・レビューとの関連性を高める方向を打ち出している。EROの報告書「乳幼児教育評価のための枠組みと資源」(Framework and Resources for Early Childhood Education Reviews, 2002)においてもセルフ・レビューの構築が課題として掲げられている。EROは、教育評価にセルフ・レビューの情報を組み入れることを通じて、保育部門におけるセルフ・レビューの開発を奨励し、支援している。従って、教育評価においては、保育施設がどのようにセルフ・レビューを実施しているかを調査するとともに、教育評価の情報としてセルフ・レビュー情報を活用しているのである。このことは、保育施設側から言えば、教育評価において、セルフ・レビュー情報のなかの施設独自の課題・取り組みに即した教育評価や助言が実施され、保育施設の多様で主体的な実践が尊重されることになる。また、教育評価が、個々の保育施設の実情や保育者の問題意識と結びついた実践の改善につながるものとなるであろう。

また、ニュージーランドでは、外部評価は教育評価(Education review)、施設内部の

評価はセルフ・レビューと、ともにレビューという用語が用いられていることは注目に値する。レビューとは、改善のためにものごとを注意深く調査し、熟考することを意味するものである。評価をレビューと捉えることは、保育・教育の「質」、状況をチェックするのではなく、保育・教育についての深い理解と保育施設・保育者の主体性の尊重を土台として、保育の現状、問題を精査し改善につなげるという考え方を読み取ることが出来るのではないかと考える。

(2)セルフ・レビューとアセスメントの関連

セルフ・レビューは、主に保育実践、保護者や職員間の関係などの協同的实践、管理と運営の三分野に関して、問題や課題を感じたテーマを選択、決定して実施される。従って、アセスメントが保育施設の課題となる場合、セルフ・レビューのテーマとして検討されることもある。

他方、アセスメントは、日々の実践のなかで、記録され、保育者の話し合いは保育計画に活用される。さらにアセスメントの記録は、個々の子どもの成長の記録としてプロフィールに保管されるだけでなく、保育施設における保育実践の記録として学期毎あるいはテーマ毎に保管されている。活用されている。さらに、アセスメント記録は、セルフ・レビューやEROの教育評価の資料・証拠として使用される。

まとめ

保育評価の目的は、子どもを軸とした保育実践の質の改善・向上であろう。

セルフ・レビューに関する保育者・施設長に対する調査結果からは、第一に、セルフ・レビューがある特定の分野・テーマを取り上げ、保育実践を振り返り、評価し、それを改善することと捉えられていること、セルフ・レビューを「やりがいがある」「実践を振り返る機会になる」「改善につながる」と評価していることが明らかになった。第二に、セルフ・レビューは、施設独自の問題関心を出発点として多様なテーマで集団的に取り組まれていることが明らかになった。第三に、セルフ・レビューの問題点として、時間や記録・仕事量の増加があげられ、専門性開発の研修や時間保障等の保育条件がセルフ・レビューの遂行に密接に関わっていることが浮き彫りになった。

アセスメント「学びの物語」に関する保育者・施設長の調査結果からは、ニュージーランドのアセスメント、「学びの物語」の実践が、保育の改善・向上に大きく貢献していることが明らかになった。アセスメント、「学びの物語」の実践が、保育者の保育への意欲を引き出し、子どもの学びに対する理解を深め、その理解を軸に保育実践を振り返り、計画に

つなげるものとなっているからである。我が国の保育の自己評価では、その一つの方法であるチェックリスト、点数式の評価や達成度による評価に対して、保育者のやる気や園内のチーム・ワークを奪い、創意工夫に満ちた保育が生まれにくくなることが指摘されている（今井和子『保育を変える記録の書き方・評価のしかた』、ひとなる書房、2009年）。ニュージーランドのアセスメント、ラーニング・ストーリーの理念・方法や実践は、我が国の保育評価、自己評価の評価観、方法の再考を提起していると考ええる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 鈴木佐喜子「ニュージーランドにおける乳幼児教育のセルフ・レビューに関する研究」、保育学研究第50巻第1号、2012年8月、査読有、1-11ページ（掲載確定）
- ② 鈴木佐喜子「子どもの育ちを大切に『保育評価』を求めてー保育所保育指針とニュージーランドのアセスメント『学びの物語』ー」、季刊保育問題研究第238号、2009年8月、査読無、28-40ページ

〔図書〕（計1件）

- ① 鈴木佐喜子『乳幼児の「かしこさ」とは何かー豊かな学びを育む保育・子育てー』、大月書店、2010年、175ページ

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 佐喜子 (SUZUKI SAKIKO)
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：70196814

(2)研究分担者 (0)

(3)連携研究者 (0)